■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

社会言語科学会ニュースレター

第24号（2007年9月1日発行）

発行：社会言語科学会 事業委員会
E-mail: jassjig2@gmail.com
URL: http://www.jass.ne.jp/

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

《目次》

［01］巻頭言
［02］研究最前線
［03］第20回大会のお知らせ
［04］博士論文情報
［05］訃報（柴田武先生）

■□［01］巻頭言 ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

いま、ウェルフェア・リングイスティクスを考える

渋谷勝己（大阪大学大学院文学研究科）

いまから５年ほど前までの６年間、終戦記念日をはさんだ８月の３週間をミクロネシアのパラオ共和国で過ごすのが、恒例の年中行事となっていた。日本の植民地時代（1914-1945）に日本語を学んだ人たちの、約５０年後の日本語維持状況を調べるのが目的の滞在である。トータルでわずか１８週間ほどの滞在ではあったが、いまでも夏になるとこの時期の思い出がひとりでに鮮やかによみがえってくる。グアムでの長い乗り継ぎ時間、空から見る珊瑚礁の島々、カツドンとラーメンを食べに通ったレストラン、ホテルの夜のネズミとの格闘、炎天下長時間歩いた道とまわりの景色、資料探しに没頭したコミュニティカレッジの図書館、日本語会話がなされるのを１週間張り込んで待ったミクロネシアで評判の医院の待合室、などなど。そしてその思い出には、調査に協力してくれた人々も、いつも笑顔を絶やさず、必ず現れてくれている。日本時代（と現地の人々は呼んでいる）に、日本人の先生に裁縫や木工を教わった、学校で遠足に行った、行儀見習いに行ったところの日本人の奥さんによく遊んでもらった、などと、日本時代のことをなつかしそうに語ってくれたときの笑顔である。

しかし、調査の時のことをもう少し詳しく思い起こしてみると、話されたことはそれほど明るいことばかりではない。戦時中、食べ物がなくてまわりで何人もの人が栄養失調でなく

なっていった、お兄さんが軍属として駆り出されたまま行方不明になっている、といった悲惨な話も、次から次へと話題にされた。

パラオは、かつてはスペインの統治下にあり、その後 1994 年に独立を果たすまで、ドイツ、日本、アメリカの統治を受けたところである。私が出会った日本語話者たちは、みな、小学校に入学するとともに日本語を学び、卒業して日本人の経営する会社などに就職して日本語を使って仕事をしていたところで終戦を迎え、そのあくる日から英語が公の言語になって、あらためて英語を習得することを余儀なくされた人たちであった。

と、このようなことを思い起こすなかで、ときどき考え込んでしまうことがある。いつも笑顔で迎えてくれるこの人たちにとって日本語とはいったい何だったのだろうか、自分がいまその日本語を調べることは果たして許される行為なのかどうか、と。ここで、さらに頭に浮かんでくることがある。徳川宗賢初代会長が提唱した、ウェルフェア・リングイスティクスである（『社会言語科学』2-1）。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

みなさんは、果たして、どのような思いや目的をもって社会言語科学の門をたたき、トレーニングを積み、さらに先端的な研究に従事しておいでであろうか。

これまでの学問の歴史を振り返ってみると、その分野のパイオニアの人々は大きな目的意識をもって新たな研究を始めるが、時の流れとともにその目的意識が風化し、いずれ型にはまった思想のない研究ばかりが行われるようになってその学問が衰退するといったことが繰り返し観察されるようである。その点、社会言語科学とは、その時代の社会的な状況や、話し手が置かれている環境のなかから立ち現れてくることばの社会問題と強く結びついて営まれる（はずの）学問であるので、問題意識や目的意識には事欠かない。その社会問題とは、言いたい内容を表すことばが見つからない、相手を傷つけずに相手の頼みを断りたいといった、会話の場面で生じる個々のコミュニケーションの問題からはじまって、パラオの例のように、ときにその人の一生を左右するような問題まで、大きな幅をもって存在しているが、その共通点は、程度の差はあっても、その問題に悩み、また苦しんでいる人たちがそこにいるということである。

このようにして、ことばによって翻弄されている人々がいるかぎり、ウェルフェア・リングイスティクスは、われわれにとっては重い課題である。

■□［02］研究最前線　■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

「多言語景観をはじめとする近年の研究について」

金美善（国立民族学博物館・日本学術振興会）

私の研究テーマは、日本の移民言語の実態について在日コリアンを素材とし、彼らの言語使用の具体的な事例を社会との関係で観察することである。

最近、言語景観、多言語景観という新しい分野の研究が始まっている。言語景観とは、公共空間における視覚的な言語コミュニケーションをさす。そして多数の言語が可視的に現れる状況を多言語景観と呼んでいる。言語景観におけるコミュニケーションには、意思疎通という言語が持つ一次的な機能のほかに、象徴性、装飾性など様々な副次的機能が付加される。伝達される情報が比較的固定されていること、一方的であることも音声言語と異なる。

多言語景観は当然ながらその社会の多言語状況、多言語話者の存在を表す。日本において意思疎通を目的とした多言語景観が現れたのは、日本が国際化、グローバル化を意識し始めた 1980 年代以降であると思われる。その前の多言語景観は、百貨店の化粧品売り場、美容室や喫茶店名など流行を先取りする、しゃれたイメージの演出に用いられた欧米語が中心であった。欧米の先進性、高級感のイメージが、文字言語に装飾されていたのである。

それに対し、現在は朝鮮・韓国語、中国語などのアジア語、さらにポルトガル語、スペイン語など多様になっている。多言語景観を構成する要因は、他言語話者の存在（移住、転勤（出稼ぎ）、留学、観光など）と、それを意識し、受容できる社会的雰囲気であろう。その面で、韓国・朝鮮語は日本の都市空間に見られる多言語景観を考える上でよい素材になる。

国籍別にみると日本には現在約 60 万の在日コリアンが居住している。一世紀の歴史を迎える在日コリアンの言語事情は、朝鮮語を母語とし日本語とのバイリンガルである一世と日本語を母語とする二世以降の世代で構成される。かつて第二次大戦期には、200 万以上を超える朝鮮語母語話者がいたことが知られており、その点では日本の多言語景観の可能性はずっと前から存在していたと思われる。しかし、日本のまちかどにその存在が現れ始めたのはつい最近のことである。現在ではまちのいたるところに韓国・朝鮮語が見られる。空港、役所など行政の公的機関が発信する韓国語もあれば、商業用看板、手書きのチラシに見られるものまで多種多様である。スーパーの陳列台に商品名として現れる場合もある。さらに韓国・朝鮮語を表す媒体もその文字であるハングルからひらがな、カタカナまでバリアントが存在する。また、その役割も、韓国からの観光客など一時滞在者を対象とする、言語サービスとしての情報表示から、来日してすでに生活基盤を日本に置くニューカマーの経済活動のやりとりまで様々である。その中でもひらがな、カタカナで表記された「かな表記韓国・韓国語」からはいろんな社会的情報を読み取ることができる。

まず、韓国・朝鮮語がかなで表記されることから、言語景観の現れ方として、必ずしも言語と文字は一致するものではないことが分かる。外来語のように市民権を得ているカナ表記外国語とはまた異なる解釈を要する。かな表記韓国・朝鮮語の対象は、ハングルが読めない二種類の日本語母語話者を対象としている。その一つは日本語を母語とする在日コリアン、もう一方は日本人である。在日コリアンにとって「かな表記韓国・朝鮮語」は、言語交替と民族文化保持といった、彼らの日本での言語事情を表すものである。たとえば、食文化を始めとする文化的慣習が彼らの普段の使用文字であるかな表記として現れる場合がそれにあたる。一方、日本人を対象とするかな表記には、現代の韓国社会に興味と関心を持つ日本人を意識し、韓国の食文化や現代社会にかかわる内容が商業的に現れていることが多い。韓流ブームがその雰囲気に拍車をかけていることも言語景観に顕著に反映する。いずれにしても

韓国・朝鮮語話者、その文化的、社会的要素が日本社会に受容されていることを意味する。かつてとは異なる、日本の異言語集団や異言語への寛容な社会的雰囲気の変化をここに読み取ることができる。

今後日本は様々な社会的事情によって必然的に多文化社会に向かうことになろう。現在も200万を越える外国籍住民が日本社会に生活している。十分とは言えないが、彼らの具体的言語事情が研究され始め、その成果が社会的に還元されつつある。その面で、先着者としての在日コリアンの言語問題は、まさに日本における外国人の言語問題の歴史でもある。現在、多言語景観に見られる韓国語、ハングル事情は日本社会の多言語事情を代弁しているともいえる。

■□ [03] 第20回大会のお知らせ ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

社会言語科学会の第20回大会は、以下の予定で行われます。

【日時】 2007年9月15日（土）、16日（日）
【場所】 関西学院大学（http://www.kwansei.ac.jp/index.jsp）
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL：(0798)54-6135（代表）
【交通】 阪急今津線「甲東園」あるいは「仁川」下車、徒歩12分

○ 招待講演

「『自分の言葉で語る』とは？－『ことばの臨床社会学』からの試み」

講師：宮原浩二郎（関西学院大学社会学部）

○ テーマ講演

「アイロニーの成立過程」

講師：岡本真一郎（愛知学院大学）

○ ワークショップ

「日本社会の多言語化と多言語景観のとらえかた」

庄司博史（国立民族博物館） 企画責任者
井上史雄（明海大学）
金美善（国立民族学博物館・日本学術振興会）
バックハウス，Ｐ．（ドイツ日本研究所）
ダニエル・ロング（首都大学東京）

「ナラティブ研究の新展開」
佐藤彰（大阪大学大学院）　企画責任者
片岡邦好（愛知大学）
西川玲子（ハワイ大学大学院）
嶋津百代（大阪大学留学生センター）
有田有希（大阪大学大学院）

「敬語を経年的に見つめる」
杉戸清樹（国立国語研究所）　企画責任者
朝日祥之（国立国語研究所）
熊谷智子（国立国語研究所）
西尾純二（大阪府立大学）
松田謙次郎（神戸松蔭女子学院大学）

「インストラクション場面における「職業的／専門的な見方」とその組織化の様相」
岡田みさを（北星学園大学）　企画責任者
西阪仰（明治学院大学）
酒井信一郎（パロアルト研究所研究補助員・立教大学大学院）
柳町智治（北海道大学）
是永論（立教大学）
五十嵐素子（光陵女子短期大学）
水川喜文（北星学園大学）

※ プログラムの詳細は，大会委員会のホームページをご覧ください.
http://www.wdc-jp.com/jass/20/

≪社会言語科学の未来を作る会 第 11 回集会のお知らせ≫
日時：2007 年 9 月 15 日(土) 懇親会終了後
場所：関西学院大学付近（懇親会終了後，懇親会場受付に集合）
主催：社会言語科学会企画委員会

■□ [04] 博士号情報　■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

今期はご連絡をいただきませんでした。
博士を取得された方は，題目、氏名、連絡先、学校名・研究科名、取得した年月、概要(150字程度)を事業委員会(jassjig2@gmail.com(*))までご連絡ください。ニュースレターにてご

紹介させていただきます。

■□ [05] 訃報 ■□

本学会の設立者とゆかりが深い名誉会員の柴田武先生が 7 月 12 日に逝去されました。
9 月 30 日（日）に「柴田先生を偲ぶ会」を開催することになりましたので、皆さまにご案内をさせていただきます。

「柴田武先生を偲ぶ会」
日時： 2007 年 9 月 30 日（日）13 時〜15 時
場所： ホテルパシフィック東京
東京都港区高輪 3-13-3（品川駅高輪口正面） Tel.： 03-3445-6711
会費： 1 万円（一人）

なお、次号「社会言語科学」に追悼文が掲載されます。

■ ■

2007 年 9 月 1 日
社会言語科学会 事業委員会発行